

## 留学生のニーズとレベルに合わせた日本語教材の開発

Development of Japanese Teaching Materials According  
to the Needs and Levels of International Students

田中三千彦・山口隆介

聖泉大学 事務部 那須由美子

Tanaka Michihiko, Yamaguchi Ryusuke, Nasu Yumiko

### 要 旨

本学に入学してくる留学生を対象とした日本語教育教材の作成を目的とし、その日本語能力の実情に合わせて、日本語能力の増強を図るとともに、留学生生活をスムーズに進めるために役立つ教材の開発を目指した。そのため、在学生からのヒアリングにより、海外における日本語教育の実情、来日当初に困ったことなどを調査した。今後入学してくる学生としては、日本語能力として、海外において日本語能力試験2級に合格するか、それに相当するレベルで、日本で学習・生活するのは初めてという留学生を想定し、このような留学生が日本で学習・生活を始めるに当たり、活用できる教材として、3つの教材を作成した。

**Key Words**：実地に使われる日本語，カタカナ語，生きた日本語を学ぶ機会

### はじめに

本学は留学生教育について7年にわたる経験を重ねてきたが、より充実した専門教育を施すには、その前提として、来日初期の日本語教育を強化することの必要性を痛感している。そこで、これまでの反省と留学生指導全般の経験を生かし、また、本学留学生の実態に即し、同時に留学生のニーズを反映した日本語指導教材を開発することを目標に本研究に取りかかった。

留学生は留学前に母国で日本語教育を受けて、一定のレベルに到達後来日するが、日本語能力2級のレベルではまだ日本語で受ける講義を理解するに

は不十分であるだけでなく、日常生活でも不安なく生活できるために今一步のレベルアップが必要である。さらに、昨今は来日前に教科書以外にインターネットで色々な日本事情を知ることができるが、母国語でのさまざまな書き込みを見てくるので、中には不正確であったり、害になったりするような知識を刷り込まれている場合もある。本学では、従来からこれらの問題に対して留学生用に日本語の授業を配置するだけでなく、個人のボランティア的活動も含めてさまざまな方法で対処してきたが、適当な市販の教材がなく目的を十分に達成できて来たとは言いがたい現状である。そこで、本研究では第1章で来日当初に本学の年間行事を理解しつつ日本で生活する最初の一年を紹介する教材、第2章で教室における日本語理解を促進するための教材、第3章では日本での生活に早速役立つようなサバイバル日本語の教材の開発を行なった。

### 予備調査

在学している留学生に、母国での日本語学習のやり方、来日当初に特に苦労した点、来日後の日本語教育に対する要望などについてヒアリングした。母国における日本語教育と、来日後実際に生きた日本語と対面して、苦労した点として下記の諸項目が挙げられた。

- ・カタカナ語が非常に多いこと、とくにコンピュータ系のカタカナ語の多さと難しさに苦労した。
- ・はじめて接した早口の関西方言はほとんど聞き取れなかった。
- ・教科書には出てこなかった新しい時事用語や講義で出てくる専門用語は、耳で聞くだけでは分かりにくい。
- ・日本人学生が良く使う学生言葉、若者言葉が分からない。

これらの問題全てに、かつ、直ちに対応することは難しいが、今回ある程度意識しつつ教材を作成したが、今後更なる工夫が必要な問題として検討を続けたい。

## 第1章 日本の四季

本教材は既存のステレオタイプの日本紹介教材とは異なり、本学の年間行事などを取り入れ、学生生活に密着して日本で過ごす最初の一年間をガイドする内容とした。同時に、筆者はコンピュータ関係の授業を担当しているため、「情報処理入門」という科目において、日本語入力演習を行う際の演習用文章としても使用することも目的とした。日本語入力演習においては、初見の文章の入力演習も必要であるが、最初の段階では、十分に内容を把握した文章で、音読演習をしたあと、「文節の区切り」を自然に身に付けつつ入力演習をすることが非常に有効と考えられるからである。

また、理解力を増し、興味を持って学習できるようにするため、とくに大学行事については多くの映像を用意した。映像は教材に本文とともに印刷される静止画だけではなく、いくつかの動画も準備した。これらの映像は、スクリーンに映像を投影し、学生にその内容を説明させるような演習にも役立つことが分かった。

内容は日本の四季を紹介する文章を、本学の行事や、学生が接するようなものを織り込んで作成することに始まる。まず、春夏秋冬それぞれに織り込むべき内容を選定し、日本語2級程度より少し上位の語彙・文法を織り込みつつ文章を作成した。作成した文章は本学に在学中の留学生を対象に理解度をチェックしつつ改定を重ねた。

完成した動画を含む教材および教材の使用マニュアル、実際の教室での指導要領（教案）一式を誰でも利用できるよう、印刷物以外に別途CD-ROMに納めた。

## 第2章 教室日本語

外務省の方針転換により、日本への留学生ビザが発給される条件が厳しくなった。日本語能力も以前に比べ、高度なものが求められるようになった。今後本学に来るだろう中国人留学生は、従来本学に留学してきた中国人留学生に比して、日本語能力は高くなるだろうと考えられ、また入学予定者は現

に高い日本語能力を示している。

そこで、留学生の学習をより効果的に支援するためには、十分なレディネス調査を行なうとともに、従来の学生より進んだスタートラインから、どのようなことを日本語の講義を受ける準備として勉強させられるかを考える必要があるだろう。

まず、教えるべき内容はどのようなものにするかを考えなければならない。そのため教材作成の観点から、大学の授業で使われる日本語について調査した。その中から重要と思われる語や、概念操作を示す表現、授業で頻出するだろう表現を適宜抜き出し、分類した。そして、付随的にではあるが、現在科目等履修生として本学に在籍している来年入学予定の留学生に示し、意味が分かるかどうかチェックしてもらった。

### (1) 日本での生活の中で出会う語・表現

「ホッカホカ弁当」、「東レ」、「トヨタ」といった、日本人なら知っていて当然の商品名や企業名、「越前ガニ」といった地方の名産、あるいは「武蔵野市」、「吉祥寺」といった地名や、「ひこにゃん」といった新しく作られたキャラクターについては当然ながら知らないということであった。

日本人学生相手には、生活に密着した実例を挙げることは普通であり、むしろ分かりやすいと思われるが、留学生にとっては、そのことがむしろ障害になりかねない。日本語の講義を聴く準備をさせる時期には、そのような生活に密着した語、常識に類する名称についても、どのような言葉を学生がいまだ知らないかを確認しながら重点的かつ意識的に、知識の抜けている部分を補っていく必要があると思われる。この種類の単語は講義の分野によって違いがあるだろうから、より多くの講義からの採取を続行しなければならない。

### (2) カタカナ語、外来語、またはそれが混ざりこんだ表現

教材や授業の進め方に関わる語では「スケルトン」、「セグメント」の意味が分からないということであった。

講義内に登場する概念等でいうと、「デジタル化」「バイオテクノロジー」「光化学スモッグ」が分からない表現としてチェックされていた。また車の種類で「ハイブリッド」、車と環境問題のからみで登場する表現である「アイドリング」も意味を理解するのに説明を要した。「ちょっとアクシデント」などという表現も、分からないということでチェックされた。

他にも「ユーザー/メーカー」「リッター」「〇〇エリア」「プロジェクト」「ブーム」「バイオエタノール」「バイオアルコール」「サイエンス」「ジャンル」「パソコンショップ」「Eコマース」など日本人ならまず立ち止まらない言葉、意味は分からなくてもなんとなくイメージをつかめる言葉が、分からない表現としてチェックされた。

日本語は外来語が相当数入り込んでいる言語であり、英語由来の外来語には、日本語ができる留学生であっても、分からない表現が相当数に上ることが予想される。これは学生がどういう言葉を重点的に学んできたかということによる個人差があるだろうと考えることもできるが、分からない留学生には講義を受ける前に相応の準備をさせる必要があると思われる。

### (3) 専門語

「買回り品」、「距離抵抗」といったものがあつたが、これらは学生が教科に依じて自ら学ぶべきものであろうし、また講義内で説明されるものも多いと思われる。

### (4) 概念の関係、主題の推移等を示す表現

「〇〇というんですね、〇〇とか〇〇とかそういう話が出てくるわけですね」「〇〇と考えるとですね、〇〇は非常に大事になります」「〇〇を前提とした」「そこに入っていく」「どうやって〇〇を作ったかというのと～」「〇〇を〇〇として掴んでもらいたい」などの表現は、教員の話し方にもよるが、似たようなことを表現する場合にもその時々の変換が多いという印象を受けた。また空間的表現や動作からのメタファーである表現（入る、掴む、とらえる）が極めて多く、これらの抽象表現に学生がついてこられていないかどうかを確認しておく必要がある。これらの表現については現時点で

は完全な聞き取りができておらず、調査を続行する。

### (5) その他のつなぎの表現や授業中の指示

教員ごとの決まり文句になっていることも多いような印象を受けたのと、プリントをもらうなどは他の学生がしている動作などから察しをつけて憶えていけることでもあるように思われ、また特に困難はないと考えられる。

以上、おおまかな教室日本語として上記のように五つに分類した、これはまだ暫定的なものであり、留学生にとっての難易による分類と表現が持つ機能による分類が混在したきわめて不完全なものである。しかし現時点では分類をより完全にするよりも、留学生にとって日本の大学の講義で出会う日本語とは何か、講義を受ける準備として学生が学び、教師が学ばせねばならない日本語とは何かを明らかにすべく、まずは雑駁ではあるが、第1報としてまとめた。

## 第3章 サバイバル日本語

サバイバル日本語とは、留学生が日本で生活していくにあたって、必要最低限な会話能力を身に付けることを目的としたものである。例を挙げると、病気になり病院に行く必要が生じた時、事故・事件に遭って、警察や救急車を呼ばなければならない時、交通手段・道順を尋ねる時、買い物やレストランで注文する時などである。

このような日常生活の中で、会話能力をそれぞれの場面に応じてコミュニケーションできるよう身につけさせることが重要であるが、日本での生活経験が初めての留学生にとっては教室で勉強するだけでなく、実際に試してみる訓練も必要と考えられる。

### ◆本学留学生の現状と問題点

平成19年度現在、留学生は42名（交換留学生4名）が在籍している。そのうち日本語能力検定1級取得者が12名、2級取得者が13名である。本研究は1級未取得者を対象に実態調査をし、その結果を基に留学生の現状に即

した日本語教材を開発するものである。

今年度、筆者は日本語能力試験2級未取得の留学生を対象に、『日常会話の能力アップ』のための講座を担当した。教材としては「聞いて覚える話し方 日本語生中継 初中級編1」(ボイクマン総子・小室リー郁子・宮谷敦美著、くろしお出版)を主に使用した。

実際に講座を実施してわかったことは、対象学生のレベルでは、文字・語彙、文法、読解、聴解について、それなりの学習成果は出て身につけているものの、その知識を日常会話という実践に活かしきれていないのが実状である。

会話は実践の繰り返しという認識から、留学生には普段から日本人と積極的に話すようにすること、テレビやラジオでニュースやドラマ、アニメ等を観るように心掛けるよう指導したが、積極的に実践している様子は見られなかった。このような状態を打破するには、具体的に見るべきテレビの番組を指定するとか、日本人学生との交流の場を用意するなどが必要と改めて認識した。

#### ◆日常会話を学習する上で必要なこと

一口に「日常会話」と言ってもいろいろな場面が想定できる。そこで留学生から下記の点を聞き取った上で、学習方法と教材を考えることとした。

- ・ どのような場面で日常会話に困ったか。
- ・ 日本人との会話の中で理解できない点は何か。

日常会話は「話す」と「聞く」のやり取り、「キャッチボール」である。「話す」練習、文法や文型、語句だけを勉強しても上達しない。会話は相手の存在があって初めて成立するものであるから、

- ・ 自分と会話をする相手の関係(友人、先生、職場の上司、同僚など)
- ・ 会話をする場所(学校、職場、レストランなど)
- ・ 会話の目的(伝言、依頼、勧誘、許可、提案など)

を理解する必要がある。そしてどのような場合でも一番重要なのは「コミュニケーション」である。

## ◆日本語日常会話の学習方法

先に述べたように、最重要課題は「コミュニケーション力」のアップである。その上で、「話し言葉と書き言葉の違い」や「会話の文法」を理解させる必要がある。

### (1) 話し言葉と書き言葉の違いを理解する

日本語には話し言葉と書き言葉がある。ロールプレイをするにあたって難しかったようである。

#### ①縮約形・音の変化

- ・「やはり」→「やっぱり」
- ・「～だけれども」→「～だけど」
- ・「～ている」→「～てる」
- ・「～てしまう」→「～ちゃう」
- ・「～なのだ」→「～なんだ」
- ・「見られる」→「見れる」

#### ②前置き

- ・「あの一」
- ・「すみませんが」

#### ③省略表現

- ・「予定があって…（行けません）。」
- ・「そうですね。でも…」

#### ④婉曲表現

- ・「考えておきましょう」は事実上の「断り」であること。

②③④については、使い方次第で会話をする相手とのコミュニケーションに大きく影響する。

### (2) 会話のための文法

文法に関しては、ある程度の基礎知識を修めているが、実際に会話に活かすのは難しかった。特に、自動詞と他動詞、現在形と過去形の使い分け、助詞の使い方、文末表現（「あまり～ない」「たぶん～だろう」などの呼応を含



む) を使いこなすには至っていない。文法は間違った使い方をすると、コミュニケーションに影響が出かねないので、正しく使えるようにしなければならない。

### ◆教材の作成

サバイバル日本語の分野に属する表現は市販の教材の中にも存在するが、今後本学に入学してくる学生のレベルとニーズに合わせた教材を自主制作するのがベストであると考え、従来経験してきた会話練習の経験を生かして、留学生が現実生活中に生活する学校付近の地域社会におけるいくつかの場面を想定してサバイバル会話練習の教材を作成した。

本年度は、次のようなケースを作成したが、このうちいくつかは、実際に本学の留学生が遭遇した事件を題材としたものである。

- ・通学中の電車のなかで定期券を失った。下車駅の稲枝駅での駅員とのやり取り。
- ・「ビバシティ彦根」に買い物に行く。金槌と釘を買いたいがどこで売っているか分からない。
- ・歯が痛くて歯医者に行く。痛い歯の位置や状況を説明する。
- ・彦根駅前の交番で「彦根キャッスルホテル」に行く道を聞く。
- ・居酒屋「どん」で卓球同好会の忘年会を行いたい。日時、人数、値段などを交渉する。

これらの教材を用いて教室で練習を行った後、宿題として実際の場で実行させ、その結果や感想をレポートさせるなどして教育効果を高めていきたいと考えている。

### おわりに

意欲を持って3つのテーマに挑戦し、在学している留学生の協力を得て、来春から使用する一応の教材を準備することができたが、当初予想していたほど簡単なものではなく、出来映えを見ると今後一層の改良が必要であるこ

とを痛感する。今回作成した教材は本文には書ききれないので、別冊として印刷した以外に、CD-ROMに収録したので、コメント、アドバイスをいただければ幸甚である。

また、本学が位置する関西地区の方言についても、ある程度の知識を身につけるための教材が欲しいところであるが、残念ながら本年度は手をつけることができなかった。

本研究に引き続き、今回作成した教材の一層の改良を図るとともに、今回及ばなかった「方言教育のあり方」などについて、今後引き続き研究を進める所存である。

なお、筆者らは現在、何らかの形で留学生の教育・指導に従事しており、日本語の指導については「日本語教育能力検定資格」をすでに取得しているか、取得を目指して学習を進めているが、より充実した指導をするために、この面でもなお一層の努力を続ける所存である。

以 上